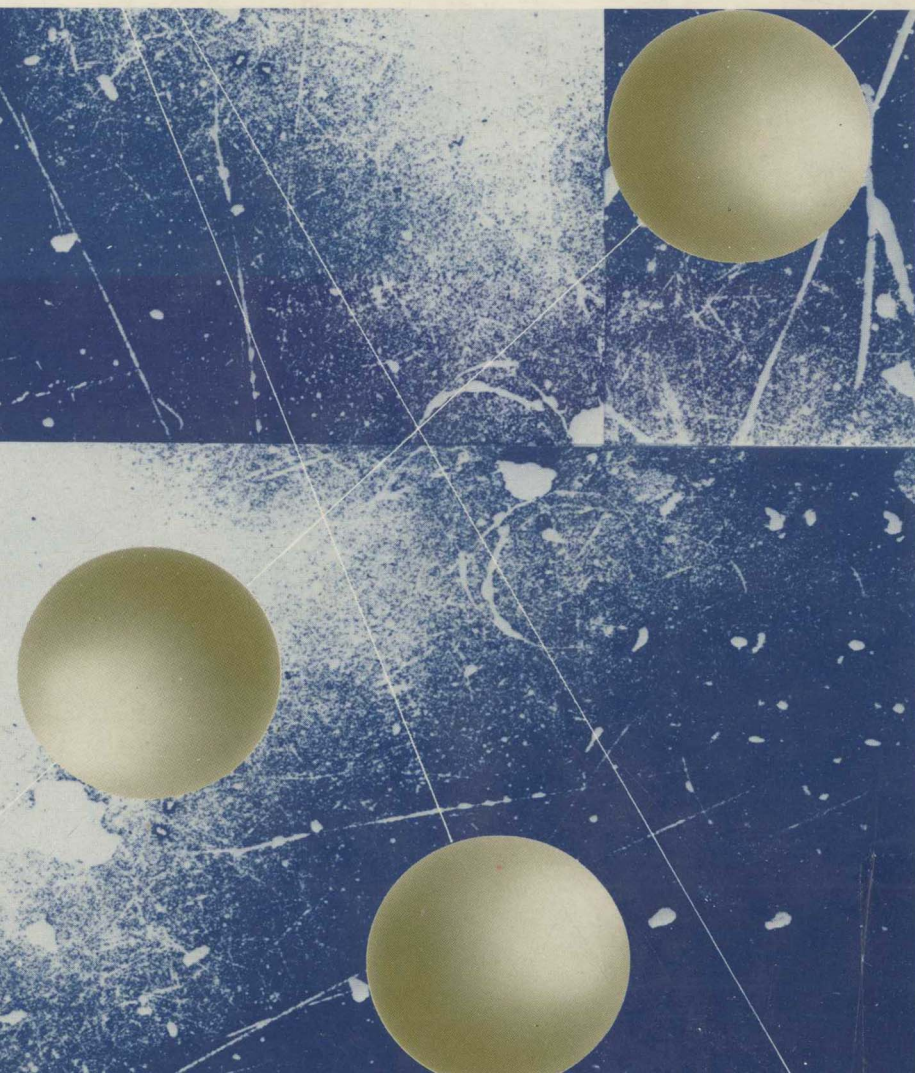


# 若き木下尚江

中野孝次



若き木下尚江

筑摩書房

若き木下尙江

---

著者 中野孝次

昭和五十四年八月二十五日 初版第一刷発行

発行者 関根栄郷

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話東京二九四一六七一一（編集）二九一七六五一（営業）

振替東京六一四一一三三

装幀者 中島かほる

©中野孝次 一九七九

曉印刷・鈴木製本

Printed in Japan 1095-82117-4804

若き木下尙江 目次

脅かす手たち

7

## I 上昇する世紀に

1 環境社会

32

2 地球うごくときと知りしとき

50

3 新時代の混沌のなかで

63

4 性の目覚め

87

5 国事犯の時代

99

6 東都遊学

111

## II 明治二十年代の青春

- 1 石もて追わるる如く
  - 2 内面という新しい世界
  - 3 恋愛は人生の秘鑰なり
  - 4 「否」を「否」とすべし
  - 5 戦争と醜怪なる事件
  - 6 浅野くわのこと
  - 7 社会主義への歩み
  - 8 入獄
- ただの人

あとがき

235

220

211

204

198

187

177

161

149

134



若き木下尙江





## 脅かす手たち

私にとって明治とは、具体的には、たとえば私の父が明治二十五年に生れたということである。私の父は、一八九二年北関東のふつうの自作農の八人きょうだいの末に生れ、一九六五年七十三歳の無名の生涯を了えた。困苦にみちた生涯であった。この事實ははっきりしている。そして、私自身の生にも関わるこのはっきりした事実からなら、私は彼が生きた時代について、具体的な内容のあるさまざまな局面を想像することができるのである。たとえば私は明治三十七、八年の日露戦争を彼がどんなふう体験しただろうか、と想像することができる。

総領息子ということばがいまだに残る土地柄であれば、明治に総領以外の息子として生れた者らは、すでにそのことで彼の生涯をきびしく——いまから思えば残酷なほどきびしく——条件づけられたのだった。かれらは当然のこととして丁稚や徒弟奉公に出された。尋常小学を了えただけで、従って家柄や身分や教育や教養などの資本を一切持たせられずに、ただその困苦に耐える

肉体と生きようとする意志を唯一の資本として、世に放り出された。それはなにもかれらが好きこのんで選んだ運命ではなかった。北関東の無名の農家の息子としてこの世に生をうけたということは、人間生物の無限の可能性からいえば、まあ何十億分の一の貧乏クジを引きあてたことであろう。それはまったくの偶然だ。偶然だが、たとえそれがどんな貧乏クジであろうとも、そのようななかに生れたのであれば、かれらは黙ってそれを自分の運命として引受け、積極的に肯定していかねばならなかった。そしてかれらは事実みなそうして生きていったに違いないのである。かれらはその悪条件のなかから、私らには超人的としか思えぬほどに立派に立ち上って、かれらの生を切り開いていった。明治という時代の活力とは、そういう悪条件を背負って生きねばならなかった私の父や、父と同じ無数の無名の人びとの生きる努力の謂いにはかならなかつただろう。そういう人びとの生を思い浮かべることができる。また彼が十二、三歳の子供として日露戦役をどう体験しただろうかと、想像することができぬ。鉄道の最後の駅からさえさらに二里も歩かねばならぬ山ひだの奥に、新聞が来ていたとは思えぬ。情報はおそらく町へ出た大人の口から口へ伝えられ、子供らは叱りとばされながらそばで聞き耳をたてていたのであろうか。それとも村の学校で先生から聞かされたのか。それはごく単純な、つまり大人たちの大半と同じ、勝った負けたの一喜一憂だったろう。

それとも、もし彼がそのとき兄たちの後を追って他国で丁稚奉公をしているのだったら、十三の少年にとって、戦局の行方なぞでなしに、毎日のけわしい日常だけが唯一の現実だったであろう。

う。親方の仕込み、打擲、叱責、きびしい修業、あかぎれ、空腹、心細さ。見知らぬ他家での辛い日常をどう生きどう耐えてゆくかが、彼の最大の関心事であって、奉天戦の結果など二の次、三の次だったかもしれぬ。

そういうひとりの具体的な人間の現実を思い浮かべることができる。それが私に手のとどく明治である。そのとき私は現在の私の生命の出発点が、明治二十五年の北関東の濃い闇に胚胎していることを、ある神秘的な驚きの念で感じる。私の地上での立場が、明治後半の二十年間を社会の最底辺で、ということは大地に一番密着した地点で生き延びた人物の立場に直接していることを、ある感動とともに確認せずにいられない。それが歴史の中に突き刺さった私の根だ。私が明治を見る視点はここ以外にありえない。私は現在、そういう肉体と意志の力だけで時代を生き抜かざるをえなかった人物のあとをうけて、父らの世代とまったく違う知識人に自分を仕立て、有用無用の知識をもって武装している。これは無学文盲の父らよりはるかに強い、有利な立場である。だが、それが一体どれだけのことなんだ、という声が同時にいつもどこからきこえるような気がする。それはたとえば私が、平民新聞による社会主義者たちの困難な戦いに全面的に共感しているあいだにもきこえてくる声である。十三歳で徒弟奉公に出なければならぬおれたちにとって、それが一体どれだけのことなんだ、と。私は社会主義運動に挺身する人びとへの共感と、その無言の声のあいだに自分が両極に引裂かれるのを感じ、この解決のつかぬ緊張関係のなかで茫然と立ちつくすしかない。

問題はこういうことになる。一方には、無学で、階級意識もなく、ただきつい所与の条件のなかでなんとか生き抜いていこうと努めている声なき人びとの生がある。一方には、それを見かね、目覚めて、かれらのために言葉を武器として戦っている知識人たちがいる。だが、この一握りの目覚めた人びとの戦いがどんなに正しく、立派であっても、それは無数の無名の前者の生を空しく無意味なものだとする理由にはならない。前者の「当時わが国の人口は約四千七百余万と称せられ、農民がその約九割を占める圧倒的農業国であつて、封建的な支配階級の保守反動政治の基盤となつていた」(『荒畑寒村』『平民社時代』)無数の無名の人びとの生も、即自的にそのまま一つの完全な生でなければうそだ、ということである。むしろ、「足利地方、大工三十七錢、石工四十五錢、左官四十錢、屋根職三十五錢」と『日本之下層社会』に記された、その人びとの生こそ、あるがままに救済されなければならぬという、強い、胸のゆらぎだすような感情が片方にはあるということだ。

私はその二極に引裂かれた自分の感情を梃子に木下尙江に近づく。私の父よりさらに二十四年前に生れた、私にとってほとんど祖父にあたるこの人物に、私がひきつけられるのは、彼が終生この解決つかぬ矛盾した二極間のダイナミズムを、真正直に生き抜いたという予感がするからである。彼は明治三十九年の劇的な転機までは、弁論と言語表現を武器として政府と戦った、最も尖鋭的な思想と言葉の闘士だった。が、天与の鋭い直覚力で時代の欺瞞を衝きながら、彼は同時に、実は言葉こそ、それが鋭利な思想の武器となればなるほど、最底辺の無学な、まさにかれら

がそのためにこそ代弁していると信じている人びとと無縁化する性質を持ちはじめたことを、一方で絶えず意識せずにいられぬ人物だったように見える。彼は運動に深入りすればするほど、——たとえば渡良瀬の農民たちとの親身な接触を通じて——痛切に思い知らされたように見える、言葉（それを思想と言ひ換えても同じことだ）は、じかにこの無言の生にとどくものでなければならぬ、と。言葉はこの無言の生の領域にこそ深く根をおろし、たえずその無限のエネルギーを汲みあげ、それに触発され検証され方向づけられつつ、生きた言葉として現実を撃つものでなければならぬ。そういう言葉＝思想と、無意識の生の領域とのダイナミックな関係の秘密を、彼はあれらの人びとのなかで最も早く痛切に感じていた人物だったように見える。これは「野性の信徒」などと言ひ出した最初の人だった。そして彼自身にもたぶん正確には理解できなかった、その二極間のダイナミズムの爆発現象が、明治三十九年の彼のあの劇的な「退隠」事件だったのではないか、という気がするのである。

言論の士として対社会的役割を果たしながら、ときとしてその言葉の有効性を疑う声や、冷たい水のように下から湧き上ってくる。声は、具体的には、言論という武器さえ持たず忍従刻苦している「約四千七百余万」の九割を占める人びとの層からきこえてくる。と同時に、それはまた彼自身のうちの闇の部分からきこえてくる声のようでもある。いや、むしろそこからきこえてくるからこそ、そしてその無言の声を平生彼が無視しがちであるからこそ、それが鬱積しては具体的に虐げられた娼婦や渡良瀬農民の姿をとって、彼の悪しき良心を刺戟してくるのかもしれないか

った。

ゆうべ、ぼくは夢に指を見た、ぼくをさす指、  
癩者をさすように。それらは労働でふしくれだち

ひびわれていた。

無知な者たち！と、ぼくは叫んだ。

罪を自覚しながら。

(フレヒト「険しい朝」)

これは、しかし言うまでもなく、言葉の人として危険な徴候である。木下尚江は一体いつからそういう声の幻聴に悩まされるようになったのか。日露戦役の最中であつたはずはない。圧迫はあまりにも巨大で、彼とその仲間にはあまりにも無力だったから。またそれ以前、彼が鍛冶橋監獄を出て毎日新聞社に入り、廃娼論や鈹毒問題で鋭い警世の刃を日々つきつけていた時期でもなかったろう。やはりそれは、いくさが終り平民社が解散して、彼が雑誌「新紀元」によって独自の「基督教的社会主義」の立場を展開しはじめて以来のことであつたに違いない。

この明治三十九年という年は、時代全体にある種の遅滞感と、また大きな理念が消滅したあと、たてまえでないありのままの自己の生地を見つめようとする空気のひろがりだしていたときだったようである。文芸の領域では、島崎藤村が、掟を破って裸の自己を世につき出す『破戒』

をひっさげて上京し、漱石は、無思想でただ持ち前の気質だけで活躍する痛快な「坊ちゃん」像で鬱屈を解放し、一方ではチェーホフの『六号室』が、一切の大仰な身振りを欠いた倦怠感で新時代の若者の聖典となりつつあった。独歩が『運命』を、二葉亭が『其面影』を発表し、無名の新聞記者白鳥が無理想無頓着な最初の小説を書きだしていた。一方ではまた、トルストイの『懺悔』に倣って、むやみと懺悔要求の強かったときでもある。こんななかで、時代のかくれた動向に人一倍敏感なジャーナリスト木下尚江が、そういう空気を敏感に察していなかったはずはないのである。彼のなかで無視されていた影の部分は、必ずや多分にその空気の刺戟をうけただろうと思う。彼は当時、比較的評判のいい『良人の自白』を三年越し連載中の小説家でもあったのだから。

そんななかで彼はこの年五月六日母くみを失った。これがどれほどの「大打撃」であったか、親という存在が当時とまったく意義をかえた現在からでは、もはや完全には想像すべくもない。とにかく彼はその直後から、いわば従来の彼を支えていた全構造体が、ひびわれ、軋み、ゆらぎだすほどに大きな、ある意味では不可解な、動揺を示したのである。それはとてもただ最愛の母を失ったためというにしては説明のつかぬ、全人間的な動揺、ないし崩壊現象なのである。母の死後二ヶ月目に出版された『良人の自白』続篇の序に、彼は「私はやくこの「人生の大打撃」のことを報告して、「母を失へるの予は、風浪烈しき湾頭に錨を奪はれたる孤舟の思ひに堪へず」と書いた。これはわかる。親不孝な私にも理解できる。彼は人生の錨を奪われたのである。だが、



それにつづけて彼が唐突にこう書いたとき、一体だれかよくこのはげしい自己否定衝動の発作を理解しえた者があつただらうか。

母の死は子に取て一の革命なり、予は回顧して最早や偽善修飾の歴史を継続するの痛苦に堪ふること能はざる也、予は過去の生活より全然脱却せざるべからず、予は神と人との前に一切の罪過を懺悔せざるべからず、今や此念に燃えて自ら制すべからざるを覚ゆ。

死者にたいして何一つしてやることができなかつた、というこの彼の胸のゆらぐような強い悔恨の情は、肉親を失つたことのある者ならだれにでも理解できよう。親不孝者の私でさえ、父がたおれてから死までの日々、これ以外のことを感じていたわけではなかつた。私は、父の生涯をほとんど食い潰すようにして一方的に自分を知識人に仕立てあげ、平生いっばしインテリくさい言辭を弄しているが、結局どんな私の合理的な思考も言説も、そんなことはこのいま死につつある人にとって何一つ役に立つことではなかつたという、とり返しのかぬ思いにだけとらえられていた。私がもし自分の知識人的生存を疑ひだし、言語表現そのものの有効性をたえず問題視せずにいられなくなつたとしたら、それはこのときのとしかえしのつかぬ悔恨Ⅱ罪の自覚に根ざしているのである。だから私にも、木下尚江の「生れて病弱、長じて放逸なりし予は、三十八年の長き、母をして遂に一日の安慰をも覚えしむること能はざりし也」の痛苦は、理解できるつもり